

「あさきゆめみ」

作…佐藤剛史

〈登場人物〉

・伊藤靖弘
・秋山進治

夜の倉庫。

棚、段ボール、テーブル、椅子などが無造作に置かれている。
戸の開く音がして、一人の男、伊藤靖弘がやってくる。
靖弘は明かりをつける。

靖弘　・・・片付いちやってるな。(時計を見る)・・・また遅刻か。

倉庫の中を眺める。棚や段ボール箱を眺める。
荷物の中からビデオカメラを出し、いろいろと調節している。
戸の開く音。もう一人の男、秋山進治が大きな風呂敷包みを
担いでやってくる。

進治　悪い悪い。

靖弘　遅いぞ、人呼び出しといて・・・何だ？　その風呂敷。

進治　いやあ、それがさあ。(風呂敷をほどきながら)ちゃんと間に
合うように家は出たんだ。でも、ここへ来る途中の道端でこい
つを見つけて。

ほどいた風呂敷から古ぼけた犬の置物が現れる。

靖弘　いぬ？

進治　明日は燃えないごみの日で、捨てられていたわけだよ。でな、
通り過ぎようとしたら、目が合っちゃって。こいつが俺を呼ぶ
んだ。ほっとけなくって、急いで家に帰って風呂敷を持ってき
て助けてやってるうちに時間だけは過ぎていった。

靖弘　これ、昔よくレコード屋の前で蓄音機に耳傾けてた奴だろ。

進治　ニッパー君。

靖弘　何？

進治　犬の名前。

靖弘 ・お前、つけたの？
進治 違う、そういう名前だったんだよ。

靖弘 本当か？

進治 本当だって。

靖弘 遅れてきた言い訳に、話作ってないか？

進治 本当だって。お！ 何だ！

靖弘 どうした？

進治 それ！

靖弘 ああ。見りゃわかるだろ。ビデオカメラ。

進治 ちゃんとこんなもの手に入れて、やってるんじゃない。

靖弘 いや、別に映画作ってるわけじゃないけどさ。

進治 そう言ってる。わざわざ持ってきたってことは、見せたい物で

もあるんじゃないの？

靖弘 実はそうなんだ。

進治 ほら、もったいぶらないで見せろよ。

靖弘はビデオを再生する。二人で覗き込む。ビデオからは子供の声が聞こえてくる。しばらく見ている二人。

進治 ……これ、加奈ちゃん？

靖弘 そう。もう歩くんだぜ。ほら。

進治 なんだ、いいお父ちゃんやってるんだ。

靖弘 まあな。…どう？

進治 おお。…最近のビデオは絵がクリヤだな。

靖弘 加奈の事。

進治 ああ、…いくつ？

靖弘 一歳と一ヶ月。

進治 もうそんなになるんだ。

靖弘 子供はすぐ大きくなるよ。

進治 それにしても、カメラ持ってこんなに動き回るか？

靖弘 まあな。

進治 その割に、絵はぶれてない。

靖弘 そこはほら、「昔とった何とか」だよ。

進治 こういうところに生かされているんだ。

靖弘 ああ。

進治 ……あの

靖弘 ほらまた。歩けるようになってじっとしてないんだ。

進治 ああ・・

靖弘 これもさ、「危ない」って言ってるのにわかんないんだから・・
ほら、また・・バカだねえ・・

靖弘はビデオの画面を見ながらしゃべっている。
が、そのうち進治があまりしゃべっていないことに気付く。

靖弘 あ、つまんなかった？

進治 いや、そういうわけじゃないよ。

靖弘 これ、まだ編集してないんだ。

進治 やっぱり編集するんだ。

靖弘 やっぱりな。だってこうやって人に見せる時、退屈しちゃう
だろ。

進治 そんなつもりは

靖弘 そうなんだって。俺だって、これ、自分の子だからずーっと
見てられるんだ。

進治 そうだよな。

靖弘 ほら。退屈してたろ。

進治 いや、だから、これもりっぱなドキュメンタリーとしてみれ
ばな。

靖弘 まあ、記録映画といえればそうだな。

進治 そうそう。

靖弘は一旦ビデオを切る。

靖弘 で、何だ？

進治 だから、記録映画として

靖弘 そうじゃなくって。

進治 え？

靖弘 何か用事があったんだろ。

進治 ああ、そっちね。

靖弘 呼び出したのはそっちだろ。

進治 それにしては、用意がいい。

靖弘 いやあ、せっかくだから見せようかな、って思っ

進治 ああ、よく撮れてたよ。

靖弘 そうか。

間。

靖弘 で、何？

進治 ・・別に用事がなきや呼び出しちゃいけないってこともない
だろ。

靖弘 そりゃそうだけど。

進治 久しぶりに、顔でも見ようかなって。ふと思っただけ。

靖弘 なんだ。そうか。

進治 そうそう。

靖弘 なら、呑みにでも行くか。

進治 そうだな。

靖弘 だったら、もっと街中で待ち合わせりやよかったなあ。

進治 そうだったな。

靖弘はビデオを片付け始める。

進治はそれを落ち着きなく見ている。

靖弘 どこにする？

進治 どこって？

靖弘 呑み屋。

進治 ああ。

靖弘 とりあえず移動して。

進治 ここでもいいけど。

靖弘 え？

進治 近くに酒屋あるし。

靖弘 昔みたいにか？

進治 そう。

靖弘 懐かしいな。この倉庫借りて、映画撮ってた頃みたいに？

進治 そうそう。あの頃はよくここで呑んだよなあ。打ち合わせす
るって言っちゃあ集まって。ロケ終わったっていつちやあ呑ん
で。朝までいたこともしゅっちゅうあったよなあ・・

靖弘 ・・進治。

進治 なに？

靖弘 素直じゃないなあ。

進治 え？

靖弘 こんなとこ呼び出しといて。

進治 やっぱり街中の方がよかった？

靖弘 「久しぶりに」って。

進治 ああ、久しぶりだよな。三ヶ月ぶり？

靖弘 ・「久しぶりに映画でも撮らないか？」って。

進治 え！ お前撮りたいの？ 困ったなあ。あ！ あれか。ビデオカメラで我が子の成長を撮っているうちに、昔の血が騒ぎ出したんだろ。もう、仕方ないなあ。まあ、俺は結構暇だからいいけど。

靖弘 違うよ。

進治 え？ 違うの？

靖弘 ・お前のセリフだろ。「久しぶりに」ってのは。

間。お互いに顔を見合わせる。

進治 ・・もう、靖弘はみんなわかっちゃうんだから。

靖弘 だろ？

進治 当たり。・・どう、久しぶりに、映画でも。

靖弘 え、本当に撮る気なの？

進治 本気だよ。

靖弘 困ったなあ。

進治 でも撮りたいんでしょ。

靖弘 撮りたいのはやまやまなんだけど、

進治 けど？

靖弘 昔みたいにはいかないよ。俺、結婚しちやっしたし。

進治 ・そうだな。

靖弘 子供もできちゃっしたし。

進治 さっき見せてもらった。

靖弘 他に誰がやるって？

進治 まだ他には話してない。

靖弘 大体さ、三年前になんで撮影終了目前で中止になったか覚えてる？

進治 金がなくなったから。

靖弘 それもあるけど。

進治 裕美が結婚したから。

靖弘 それも旦那の転勤でマレーシアだ。

進治 主演女優が・・

靖弘 どうしようかって考えてるうちに、塚もっちゃんも仕事忙しくなってる。

進治 そうそう。

靖弘 他の奴らも忙しくなって。気が付けば、コンテストの締め切りも来ちゃって。

進治 あとちよつとで完成だったのになあ。

靖弘 もう俺達だって三十三だよ。

進治 村マンはもう少し若いだろ。

靖弘 若いって、村マンも、もう三十代だろ。

進治 え、もうそんなになるか。でも、他の奴らは

靖弘 他の皆だって三年前より仕事忙しくなってるだろ。結婚した奴だっているし。

進治 俺はしてない。

靖弘 お前はな。

進治 他にもいるだろ。ナベとか涼子とか。

靖弘 いるけど、独り者ばかり集めて撮るつもりか。

進治 だったらお前は呼ばないよ。

靖弘 あ、そうか。

進治 結婚は関係ないんだ。

靖弘 お前は結婚しないの？

進治 俺？

靖弘 そう、お前。

進治 ・・俺はまだな。

靖弘 またそんなこと言って。そろそろ決めないと奈津美ちゃんに愛想尽かされちゃうぞ。

進治 愛想尽かされた。

靖弘 え？

進治 ・別れた。

靖弘 ・・そうか。・・五年、か？

進治 五年と四ヶ月。

靖弘 そうか。・まあ、よく続いた。

進治 そういう言い方は。

靖弘 すまん。

進治 俺だって寂しいんだよ。

間。

靖弘 ひよつとして、寂しくって「映画撮ろう」とか言ってる？

進治 そんなつもりは。・ニッパークうん。

靖弘 また、そうやって。
進治 寂しくって悪いか。
靖弘 何だよ。
進治 寂しさが原動力になったっていいじゃないか。
靖弘 開き直ってるのか。
進治 俺に限らず、人間というものを考えてみる。
靖弘 大きく開き直ったな。
進治 そう。人生にはいろいろある。人間関係がうまく行かなくな
って悩む。仕事が思うようにいかず、ストレスが溜まる。
靖弘 まあな。
進治 で、そういったことを一時忘れようと、人は娯楽を求めるわ
けだ。
靖弘 強引に来たね。
進治 その先は人それぞれだが、映画を求める奴は確実にいるわけ
だ。
靖弘 で、そういう奴は映画館に行くわけだ。
進治 そうそう。でも、映画館の映画じゃ飽きてくる奴もいる。
靖弘 そうしたら、マイナーな映画やってるミニシアターへ行く。
進治 そうそう。でも、何か今一つ物足りなさを感じる奴もいる。
靖弘 そういふ奴は、芝居を観に行く。
進治 どうして。
靖弘 芝居も面白いらしいぞ。
進治 どうして映画から離れるかなあ。
靖弘 レンタル行って名作を借りてくる。
進治 それもあるけど。
靖弘 見逃したテレビドラマも借りてくる。
進治 そんな、借りるとかじゃなくって、もっと積極的に。
靖弘 積極的にな？
進治 自分で作る。
靖弘 何を？
進治 ほら。(ビデオを指差す。)
靖弘 ああ、子供作ったな。
進治 あくまで俺に映画を撮らせないつもりだな。
靖弘 いやいや、お前の言いたいことはわかってるよ。
進治 わかってるだろ。
靖弘 でもな、映画撮るには暇はないし、人はいないし、金はない
し。

進治 誰でも始めは皆そう。そこから若さと情熱でだな

靖弘 三十三は若いのか？

進治 若いだろ。

靖弘 どうかな。

進治 そりゃあもう、充分若い。「人生八十年」、まだまだ折り返してもいないんだよ。これからこれから。

靖弘 でも、十年前のような若さはない。

進治 何言ってるの。あれは「若い」んじゃないの。「ひよっこ」なの。三十過ぎてからだだよ、本当に良い物を創れるのは。

靖弘 ・お前、変わってないなあ。

進治 そうさ、俺はいつだって全力投球。

靖弘 その、全て自分の良いように解釈するところ。

進治 何言ってるんだ、俺はな

靖弘 十年前に俺に言ったこと覚えてる？

進治 え？ 何言ったつけ？

靖弘 「好きなことのできるのは今のうちだけだぞ。三十過ぎてみる。感性鈍って、何にも出来なくなっちゃうんだから」って。

進治 そうだつけ？

靖弘 覚えてないの？

進治 そんなような事言ったような覚えがあるような・

靖弘 言ったんだよ。

進治 でも、よく覚えてるね、そんなセリフ。

靖弘 だって、その言葉に心動かされて、一緒に映画創り始めた訳だから。

進治 今も心動いてる？

靖弘 今は、なあ。

進治 あれ。それこそ感性鈍っちゃったんじゃないの？

靖弘 だから昔みたいには感じないっていうか。

進治 年寄りみたいなこと言って。

靖弘 この歳になって、いろいろやらなきゃいけない事が増えてきたら、いつまでもそんな気持ちでもいられないだろ。

進治 ねえねえニッパ―君。靖弘がね不感症になっちゃったみたいよ。

靖弘 人の話は真面目に聞きなさい。

進治 ・はい。

靖弘 奈津美ちゃんにもそうだったのか。

進治 ねえ、今日は俺の人生の反省会じゃないでしょ。

靖弘 似たようなもんだよ。
進治 俺はただ、前みたいにみんなで映画が撮れたらなって、
靖弘 だから、前みたいにはいかないって。
進治 でも、お前の夢はまだここんとこに残ってるんだろ。
靖弘 夢は夢のまま思い出として取って置いた方がいい時だってあるんだ。

進治 冷たいこと言うなよ。

靖弘 お前だってそうだよ。

進治 俺はいつでも映画俳優のつもりだ。

靖弘 無茶言うなって。

進治 無茶じゃない。さっきもここへ来る途中、警官に職務質問されたけど、ちゃんと「映画俳優だ」って答えてやったよ。

靖弘 何、職務質問されてるの？

進治 ちよつと怪しいと思うとすぐ職務質問だ。

靖弘 お前、怪しかったの？

進治 ニッパー君。

靖弘 ・ああ・。

進治 夜中にこの風呂敷包みじゃあな。

靖弘 そりゃあ「何だ君、その風呂敷包みは」だよ。

進治 そう。そう言われた。で、俺はな「うるさいな」って言っちゃったわけよ。

靖弘 「うるさいな」はないだろ！

進治 そう。よくわかるね、警官のセリフ。

靖弘 そうなの？ いや、そういう言い方されたら、つい、な。

進治 そうか。でな、さすがに俺もまずいと思ってだな、「いやあ、放っておいて下さい」って。

靖弘 そう言われても、放って置けないだろ。

進治 そう！ で、「私みたいなものにお巡りさんの貴重な時間を使わせちゃあ悪いですから」って。

間。

進治 ねえ、警官のセリフ。

靖弘 俺が？

進治 他に誰がいる。

靖弘 でもわかんないよ。

進治 ほら、「アドリブ脱線ゲーム」のノリで。

靖弘 ああ、昔やったなあ、「アドリブ脱線ゲーム」。
進治 ほら。

靖弘 ああ。・「何だ、その風呂敷包みは」。

進治 ・「もつと「らしく」やってよ。昔みたいに。

靖弘 俺は役者じゃなかったんだから。

進治 いや、お前は役者やれると思ってたぞ。

靖弘 またおだてる。

進治 代役やったりした時、やりやすかったもの。

靖弘 まあ、俺も楽しかったけどな。

進治 ほら。

靖弘 でも、いざとなると緊張するから。

進治 今は緊張する必要ないんだから。

靖弘 ・「でもなあ。

進治 そうだ。確か・

進治は段ボール箱から警官の帽子を出す。

進治 やっぱりあった。

靖弘 あ、これ。「むかつく日本」の時の？

進治は帽子を靖弘に渡す。

進治 やってよ。

靖弘 ・「少しだけだぞ。」

靖弘は帽子をかぶる。

靖弘 ・「何だね、その風呂敷包みは！」

進治 「いや、気になさらないで下さい」

靖弘 「ちよつと見せなさい」

進治 「いやあ、つまらないものですよ」

靖弘 「中身は何だね」

進治 「唯のニッパ―君ですから」

靖弘 「なんだ？ その『ただのニッパ―君』というのは」

進治 「しようがないなあ。はい、これ」

靖弘 「ああ、これか。懐かしいなあ」

進治 「見たことあるでしょ」

靖弘 「最近めっきり見なくなっただけかと思っただけ、君が盗んで廻ってたのか」

進治 「違いますよ。俺はただ落ちてるのを拾ってきただけで」

靖弘 「どこに落ちてたの？ レコード店の前？」

進治 「いいえ」

靖弘 「それは落ちていたとは言わないよ」

進治 「だから、これはゴミ捨て場に落ちていたんですよ」

靖弘 「ふうん。はい。じゃあ、免許証見せて」

進治 「今日は車じゃないんで」

靖弘 「他に身分証明になるようなものは？」

進治 「持ってないです」

靖弘 「仕事何やってるの？」

進治 「映画俳優です」

靖弘 「ほお、どんな映画に出てるの？」

進治 「知らないと思いますよ」

靖弘 「言ってみなさい。こう見えても本官、映画は好きでよく見てるんだから」

進治 「『紅に虹を見た』」

靖弘 「・・・『紅の豚』なら見たけどなあ」

進治 「『ルンバ・バトル・シンドローム』」

靖弘 「・・・知らんなあ」

進治 「『むかつく日本の夜明けにアサガオを植えよう』」

靖弘 「・・・それ映画のタイトル？」

進治 「大きな映画館じゃやりませんでしたからね」

靖弘 「そうか。それじゃああんまりギャラ入らないだろ」

進治 「ギャラなんて、もう。毎回赤字で」

靖弘 「赤字って。君、仕事は？」

進治 「映画俳優です」

靖弘 「でも、それでお金もらってないんだろ」

進治 「もらってないどころか、持ち出しになることもしょっちゅうで」

靖弘 「それは仕事とは言わないんじゃないのかな」

進治 「いえ、自分では天職だと思ってます」

靖弘 「それは趣味って言ってね」

進治 「そうなんですよ。趣味が昂じて職業になったっていうか」

靖弘 「私が聞いているのは、何やって生活しているか、ということ
でね」

進治 「そうなんですよ。私が俳優を辞めてしまったら生活できないって言うか、生きていけないって言うか。もう、根っからの俳優って言うんですかねえ」

靖弘 「・質問を変えよう。生活費は何をやって稼いでいるの？」

進治 「・・事務用品の仕入れと配送を」

靖弘 「そうそう、そういうのを仕事っていうんだよ」

進治 「でも、それは先月辞めました」

靖弘 え？ 何で？

進治 「いえ、いろいろとありまして」

靖弘 ちよつと、本当に辞めたの？ 長島事務器。

進治 「・・何で知ってるんだ。俺が長島事務器にいたことを」

靖弘 そりゃ知ってるよ。

進治 「警察権力が、何で俺みたいな小市民をマークして」

靖弘 ちよつと待てよ。

進治 「俺は右翼でも共産党でも武装宗教団体でもないんだよ」

靖弘 わかった。俳優なんだろ。

進治 「そうさ。あ！ まさか、いまだに舞台俳優には共産党員が多いなんて思ってるんじゃないのか？ そんな考えは古いし、だいたい俺は映画俳優なんだから」

靖弘 落ち着けよ、進治。

進治 「・・何で、俺の名前まで」

靖弘 そろそろ芝居終わりにしよう。

進治 「芝居じゃなくて、映画だって言ってるだろ。一体俺が何したっていうんだ」

靖弘 どうしたんだ。

進治 「どうしたもこうしたもないだろ。俺は俺のやりたいようにやるんだよ」

進治は靖弘に掴みかかる。

靖弘の首をしめる進治。

靖弘 やめろよ。

進治 「やめろ、と言われてやめるほど、俺の気持ちは柔じやないんだ！」

靖弘は進治の手を振りほどき逃げる。追う進治。

靖弘は段ボール箱に手が届くと、それを思いつき進治にぶ

つける。

倒れる進治。解放される靖弘。

間。

靖弘は恐る恐る、進治を覗き込む。

靖弘　・・おい。・・進治。

靖弘は進治を少し揺り動かす。

進治はゆっくりと体を起こす。

進治　いてえ。

靖弘　大丈夫か？

進治　・・あれ？・・俺、また何かやっちゃった？

靖弘　覚えてないの？

進治　・・えっと。何となく。警官に職務質問されて・・

靖弘　どういうこと？

進治　・・最近、興奮すると頭の中がふつと真っ白になっちゃうつて言うか・・

靖弘　病気なのか？

進治　いや、大したことはない。

靖弘　医者には？

進治　この間、涼子のところ行って来た。

靖弘　どうだった？

進治　相変わらず、口うるさい看護師やってたよ。

靖弘　・・涼子じゃない。お前だよ。

進治　俺？

靖弘　お前はどうかだったんだ？

進治　・・俺は、大した事ないんだよ。ちよつと疲れとかストレスとか溜まってるんだって。

靖弘　それだけでか？

進治　まあ、詳しいことはわかんないけど。こうやって入院してるわけでもないんだから。

靖弘　薬は？

進治　仕方なく飲んでるよ。とりあえずそれで大丈夫らしいからな。

靖弘　そうか。

進治　そう。

靖弘　・・そういえば仕事辞めたのか？

進治 え？ 誰に聞いた？
靖弘 お前に。
進治 いつ？
靖弘 今。
進治 あれまあ。
靖弘 辞めたのか？
進治 ・・それがいろいろあつてな。
靖弘 辞めたんだな。
進治 そんな、責めるような目で見るなよ。
靖弘 それで今は？
進治 ちゃんと失業保険の申請は出した。
靖弘 「ちゃんと」って・・まったく、三十三にもなつて何やってるんだよ。
進治 しょうがないだろ。過ぎたことは。
靖弘 過ぎる前に相談くらいしてくればよかつたのに。
進治 すまん。今度はそうするよ。
靖弘 今度があるのか？ 今度が。
進治 いやあ・・無いことを願いたい。
靖弘 ・・お前さあ、映画撮るより前にやることいっぱいあるんじゃないの？
進治 そりゃあ、いろいろあるんだけどな。いっぺんには出来ないだろ。だから順番にだね
靖弘 だからその順番が違うんじゃないかって・あ！
進治 どうした。
靖弘 警官！
進治 警官？
靖弘 さつき会った警官、首絞めたのか？
進治 そんなことするわけないだろ。
靖弘 ・・警官役の俺は首絞められたから。
進治 え？ 本当？ 大丈夫？
靖弘 俺は大丈夫だけど。本物にはしてないんだな。
進治 してたら、こんなところにいられるわけないだろ。
靖弘 じゃあ、どうやって警官のところ通してもらったんだ？
進治 そりゃあ、走って。
靖弘 走って？
進治 ああ。走って。
靖弘 逃げてきたのか？

進治 まあ、振り切ってきたわけ。なあに、俳優は体が資本だからな。日頃から鍛えていたのがこんなところで役に立つとはな。

靖弘 ・・まあ、別に罪になることしたわけじゃなさそうだし・
進治 そうそう。
靖弘 こいつもちゃんと捨てられてたわけだし。
進治 そうなんだよ。かわいそうにな、ニッパ―君。
靖弘 ・・ちよっと片付けるか。

靖弘は進治にぶつけて散らばった段ボール箱を片付ける。

進治 ひよっとして、これを俺の頭に？

靖弘 仕方なくな。

進治 すまなかつたなあ。

靖弘 いいよ。お互い無事だったんだし。

進治 ・・よし。お詫びの印に今日は俺のおごりだ！

靖弘 失業者が。金あるのか？

進治 無いから、その酒屋で安くあげていい？

靖弘 身体は大丈夫なのか？

進治 平気平気。ちゃんと鍛えてあるからね。

靖弘 そっちじゃなくて、疲れとストレスの方。

進治 だから呑むんじゃないの。ストレス発散に。

靖弘 ・・そうだな。

進治 何かリクエスト、ある？

靖弘 なら、ビールと柿の種。

進治 それと、イカ燻。

靖弘 あとは任せる。

進治 了解！

進治は買い物に出かける。

靖弘はそれを見送った後、携帯電話を出し電話をする。

靖弘 ・・もしもし、ああ久しぶり。涼子の方は？・・うん、もう歩くんだよ。また今度、うちに来いよ。

・・え、話？ ああ・・進治の事なんだけど。この間病院行ったんだって？ どうなの？

・・何？ それ・・うん。不眠症みたいなのから来るの？ ・・

そう。・・・実は今一緒なんだ。あの倉庫で。・・・それが、さつき話してて、興奮したら、急に暴れ出しちゃって、後で聞いたら覚えてないって言うんだ。一応、様子聞いとこうと思ってる。・・・重くはないのね。興奮させなきゃとりあえず大丈夫。：今？ ああ、もう落ち着いて酒買いに行ってる。

・まづいの？ 酒？ ・わかった。あんまり飲まさないようにする。そろそろ戻ってくるかもしれないから、切るよ。

あ。そういえば涼子、あの医者どうした？ ・ ・ ・ そんな不毛なことやってたら駄目だぞ、別れるよ。ああ、大きなお世話か。わかった。

また何かおかしくなったら、お前じゃない、進治が。怪しいと思ったら電話する、かも、しれない。・・・それじゃあ。

靖弘は電話を切る。片付けを続ける。

進治が戻ってくる。

進治 　　ただいま。いやあ、いろんなビールがあるんで迷って、結局いろいろ買ってきちゃった。

靖弘 　　・ ・ ・ そんなに買って ・ ・ ・ おまえ、本当に大丈夫なの？ 酒。

進治 　　大丈夫だって言ってるだろ。

靖弘 　　医者にか言われてないかな、っと思ってる。

進治 　　だから、これも治療の一種、ストレス解消法。友達だったら

治療に付き合いなさい。

靖弘 　　いや、でも ・ ・ ・

進治 　　何だ、あんまり飲みたくないのか？

靖弘 　　まあ、ちよつとなあ。

進治 　　そうか。こんなに買ってきちゃったのになあ。

靖弘 　　そうだなあ。

進治 　　仕方ない、その分は俺が飲むよ。

靖弘 　　いや、そんなことしなくっても。

進治 　　気にするな。誰でも体調悪い時はある。

靖弘 　　体調は良いんだ。お前の分まで飲んでも大丈夫なくらい。

進治 　　何だ、柄にもなく遠慮してるのか？

靖弘 　　俺じゃなくって、お前の体調の方が。

進治 　　・ ・ ・ 心配してくれてるのか？

靖弘 　　ああ。

進治 　　そうか ・ ・ ・ いい奴だな。

靖弘 そんな・
進治 ・・友達だな。
靖弘 照れる事言うなよ。
進治 よし！ 二人の友情に乾杯だ！
靖弘 だから飲まなくなってる。
進治 本人が大丈夫って言ってるんだから、大丈夫なんだって。

進治はビールを並べだす。

靖弘 あ、そういえば、これ
進治 何だ。

靖弘 この荷物。よく三年も保管してもらってたよな。

進治 俺の人徳。

靖弘 おじさんは、もうここ使ってないのか〜

進治 先週で荷物とか全部出しちゃったよ。

靖弘 工場つぶれたの？

進治 いや。河原の近くに引っ越した。ここより一回り小さいかな。

靖弘 うまくいってないのか。

進治 どこも大変みたいだよ。

靖弘 じゃあ、この棚は？

進治 今月中に運び出さなきゃ。

靖弘 どこへ？

進治 それも相談したかったんだよ。

靖弘 ・・フィルムは残ってる？

進治 あれは塚もつちやんとこ。

靖弘 ああ、そうか。

進治 絵コンテとか台本はあるよ。

靖弘 本当？

進治 見たい？

靖弘 見たいなあ。

進治 よし、ちよっと待ってる。

進治は棚の辺りに行く。

靖弘はこっそりとビールを脇に寄せる。

進治 お、あった、あった。

靖弘は進治のところへ行く。

靖弘 本当だ。「紅に虹を見た」。

進治 ほら、これも。

靖弘 懐かしいなあ。

二人はしばらく段ボール箱を開けて、中身を出したり、眺めたりしている。一冊の台本を見つける。

進治 それから、これ。

靖弘 「あさきゆめみし」。

進治 未完成。

靖弘 ・・もう三年か。

進治 初の長編が水の泡。

靖弘 せっかくコンテストに出すつもりだったのになあ。

進治 時代物か？ ってよく聞かれたよなあ。

靖弘 ああ、シナリオ、村マンだったから。

進治 あいつ国文学科だっけ。

靖弘 そうそう。

進治 でも全然時代劇じゃなかったなあ。

靖弘 タイトルだけこだわってたんだよ。

進治 それに実際の絵は西部劇のノリだったしな。

靖弘 塚もつちゃんが好きだったから。

進治 ラストシーンなんかマカロニウエスタンか、って。

靖弘 そうそう。

進治 ・せめてこいつが完成してればな。

靖弘 ・そうだな。

進治 ラストシーン撮って、あとちよこちよこつと編集して。・・裕

美ももう二ヶ月くらい日本にいたりやあなあ。・・

靖弘 ・・実はな、ずっと考えてたんだ。

進治 何を？

靖弘 こいつのラストシーン。

進治 果たせぬ夢にうなされ続けていたか。わかる、俺もそう。「し

のぶと滝本の別れのシーン」を撮るはずが、しのぶ役女優と

お別れじゃあなあ。・・

靖弘 違うよ。考えてたのは、「しのぶ」の出ないラストシーン。

進治 え？ ・・おい、それって裕美がいなくても撮影できるって

こと？

靖弘 マレーシアから呼び出せないんだからなあ。

進治 そんな案があるなら、いつでも声をかけてくれれば。

靖弘 みんな忙しかったろ。

進治 俺は関係ないよ。

靖弘 俺も忙しかったし。それに一応塚もつちちゃんとか、みんなで話し合っただけじゃないと。

進治 まあ、みんなの作品だからなあ。それで、どんなラストなんだよ。

靖弘 話覚えてる？

進治 バカ言うな。セリフまで覚えてるよ。

靖弘 流石だなあ。

進治 当たり前だ。「俺は本当はこんなところにいちやいけない人間なんだ。だからこのままここで別れた方がいいんだ。これ以上おまえを辛い目に合わせられない」

靖弘 わかりあいながらも、別れなければならぬ二人。

進治 ・・まさか、あそこ、俺一人で旅立つの？

靖弘 そう。

進治 寂しくないか？

靖弘 寂しいだろ。だからいいんじゃないか。

進治 そうか。じゃあ、ラストはこうか？ 「荒野に一人たたずむ滝本」

靖弘 一陣の風が吹く。ザーツ。

進治 彼の脳裏をしのぶとの楽しかった日々が走馬灯のように駆け巡る。

靖弘 ここで二人の楽しかった日々がフラッシュ。滝本の顔徐々にアップ。

進治 その思い出を断ち切るかのように、峠を越えていく滝本。

靖弘 きびすを返す彼の、その背中をとらえたカメラがゆっくりと

ひいて行く。音楽。(口ずさむ)

進治 その後姿には悲しき運命を背負いながらも尚、力強く生きていこうとする男の哀愁がにじみ出る。

靖弘 さらにカメラがひくと、その背中は雲のまばらな空に溶け込んでいくように見える。

進治 必ず帰ってくるんだ、と決意を持った旅立ちなのだ。

靖弘 空はゆっくりとオレンジ色を帯びてくる。日は落ちてゆくのだが、その薄オレンジ色の夕焼けは明日の晴天を予感させるよ

うな美しさを持つていた。

進治 夕焼けに溶け込む滝本。

靖弘 クレジットが流れる。

進治 スクリーンの下からこうやって出てくる。そして

進治・靖弘 エンドマーク・・・とロゴ。

二人は架空のスクリーンにエンドマークとロゴマークを作っ
て見ている。

進治 ・・いいねえ。

靖弘 こっちも渋くていいんじゃない？

進治 いいよ。いいよ。いけるよ。

靖弘 やっぱり？

進治 とりあえず、役者は「滝本」役の俺がいるから

靖弘 そう。

進治 ロケ地はやっぱり

靖弘 「いろは坂」。

進治 だよな。よし、早速準備開始だ。

靖弘 気が早いな。

進治 善は急げ。

靖弘 でも、まだ煮詰めた方が良くと思うんだ。

進治 そんなの人が集まっちゃえば何とでもなるさ。みんなでイメー

ジ膨らませて。

靖弘 みんな話に乗ってくるかなあ。

進治 決まってるじゃないか。新しいの一本撮ろうっていうんじや

ないんだから、時間だって何とかなるだろ。

靖弘 そうだな。一本まるまる撮り直すわけじゃないんだしな。

進治 そうそう。みんな忙しいんだから。

靖弘 とりあえず、誰に連絡とろう。

進治 まず、監督の塚もっちゃん。それからシナリオの村マン。

靖弘 あ、ちよっと待って、書き出しとこう。

靖弘 はメモ帳を出し、書き始める。

その間に進治はビールの位置が変わっていることに気付いて
直す。

靖弘 塚もっちゃん、忙しくないかなあ。

進治 忙しかったらシナリオの手直しだけでも参加してもらえばいいじゃないか。

靖弘 そうだな。やっぱりあいつが目通してくれるだけで安心だからな。

進治 そうさ。みんな忙しいんだし。

靖弘 あと、録音はナオちゃん、照明は社長。

進治 まあ照明はレフ板持ちだけだな。

靖弘 社長、レフ板持ち。

と、話をしている間に進治はビールを開けている。
そして、靖弘にもビールを渡す。

進治 ほら。

靖弘 ありがとう。

靖弘はビールを受け取り飲みながら話を続ける。

靖弘 でも、社長のレフ板が結構いい感じで

進治 あいつ凝り性だから。入射角と反射角が、とか

靖弘 そうそう。

進治 難しいこと考えてるつもりなんだぜ、あれで。

靖弘 あと、出番ないけど役者も一通り声かけとくか。

進治 ああ。みんなであれこれやってた方がいいよ。
靖弘 だな。

進治 まず、ナベ、リッキー。

靖弘 それから涼子・

ふと、靖弘はビールに気付く。

進治 あと、早田隊員にも声かけとかないと怒るぞ。あいつ怖いからなあ。

靖弘 ちよっと待て。

進治 何だ？

靖弘 いつの間に飲んでる。

進治 自分だって飲んでるだろ。

靖弘 あー。

進治 あ、すまん。俺だけエビスで。怒ってる？ じゃあ、お前に

もエビス。

靖弘 肝心なこと忘れてた。

進治 え？ 何忘れた？

靖弘 お前の事だよ。

進治 俺を忘れちゃ困るなあ。ちゃんと書いとけよ「滝本役、秋山

進治」。

靖弘 違うよ。お前の体がちゃんとしてからじゃないと、撮影なんか入れないだろ。

進治 俺は大丈夫だって。

靖弘 飲み会でな、「俺は大丈夫だ」って言ってる奴が一番酔ってるんだよ。

進治 まだ酔ってないよ。

靖弘 例え話だ。

進治 そんなに俺に映画撮らせたくないのか？

靖弘 撮らせないよ。でも体治してからな。

進治 それじゃ駄目なんだよ。治んないんだよ。

靖弘 そんなことないだろ。ちゃんと治す方法はあるんだろ。

進治 そうさ、ちゃんとするよ。

靖弘 だったら、それをやれよ。

進治 ああ。だから、映画を撮るんだ。

靖弘 ・・またそうやって都合の良いように解釈して、自分のペー
スに引き込もうと思ってるだろ。

進治 そうじゃないよ。

靖弘 医者は何て言ってる？

進治 医者は関係ないだろ。

靖弘 関係ないわけないだろ。

進治 俺の体なんだから。

靖弘 この間、医者に行ったんだろ。

進治 ああ。

靖弘 どうだった？

進治 ・・相変わらず口うるさい看護師

靖弘 お前の事。

進治 ・・大丈夫みたいよ。

靖弘 それはお前の思い込みじゃないのか。

進治 そうじゃないよ。

靖弘 じゃあ何がどう大丈夫なんだ？

進治 具体的なことは・・俺、医者じゃないし。

靖弘 ・ ・それがはつきりするまでは、大事を取って、酒も映画も控えるよ。

進治 酒と映画を一緒にするなよ。

靖弘 今のお前には一緒だよ。

進治 一緒じゃないだろ。お前にとっても映画は大事なものじゃないのか？

靖弘 そりゃそうだけど、今のお前には

進治 俺はこうしてちやんとここにいるだろ。入院もしてないし、薬も飲んでるし、大丈夫なんだよ！

靖弘 落ち着けよ。

間。

進治 聞いてくれ。

靖弘 わかった。

進治 ありがとう。

間。

靖弘 どうした？

進治 ああ・ ・ ・座るか。

靖弘 そうだな。

二人は座る。

進治 ・ ・順番に話すわ。

靖弘 ああ。

進治 ・ ・三年前、映画が中止になった時、俺、すごく寂しかった。

靖弘 俺だって寂しかったよ。

進治 でも仕事もあったし、奈津美もいたから寂しさもそう長くは続かなかった。奈津美とはちやんとしようって思ってたしな。

靖弘 そうだな。

進治 でも、なんか「違う」って思い始めちゃったんだよな。三十過ぎにもなつて、ふと振り返ると、映画撮ってた頃が一番生き生きしてたなって。

靖弘 そりゃ、そうだろうな。

進治 そう思うだろ。

靖弘 ああ。

進治 そうすると、今の俺は生き生きしてないってことになるじゃないか。

靖弘 ・・いや、そんなこと言ったら、俺だってそうだろう。

進治 お前は家族の話してる時、生き生きしてるよ。

靖弘 ・・そうかもしれないな。なら、お前も奈津美ちゃんど・

進治 生き生きしてない俺を好きになってちやいけないんだよ。これは俺じゃないんだ。俺じゃない俺を好きになってちや嫌なんだよ。

靖弘 ・・

進治 だんだん俺イライラしちゃってさ。仕事も面白くなくなってきた。きちゃって辞めて・・。奈津美も俺の事良くわかんなくなっちゃったって・・それで会わなくなると・・気が付いたら、一人だった。

靖弘 ・・それで、映画を？

進治 正直言えば寂しくて映画撮ろうって言ってる部分もある。

でも、もう一度映画撮れば、あの頃の自分を取り戻せるんじゃないかって・・何か忘れてるんだ、多分。

靖弘 映画を撮ればいいのか？

進治 わからん。でも、何もしないで自宅療養なんてしてられないだろ。

靖弘 じっとしてられる性格じゃないからな。

進治 わかってくれた？

靖弘 確かにお前の場合、気持ちを立て直すには映画が一番だろう。

進治 そうなんだよ。

靖弘 でも、だからってそれにみんなを付き合わせるつもりなのか？

進治 そうだとしたら、申し訳ない。でもな

靖弘 映画一本撮るにはな、お互い気を使ったり、無理しなきゃいけない場面ってのが出て来るんだよ。それはお前だってわかってるだろ。そこで新たなストレス抱え込んだらどうするんだよ。

進治 そうならないように努力するよ。

靖弘 だから、お前は今、無理に努力できない体なんだよ。

進治 医者でもないのにそんなこと言うなよ。

靖弘 じゃあ、医者に聞いても良いのか？

進治 医者に？

靖弘 医者から許可が出たらやってもいい。

進治 医者はこういうことに理解がないから、
靖弘 理解のある奴ならいいのか？
進治 理解のある奴？
靖弘 涼子。
進治 ・ ・ わかってくれるかもしれないけど、あいつも仕事だから
なあ ・ ・
靖弘 実はさつき涼子に電話した。
進治 え？ ・ ・ あ！ 俺が買い出しに行ってる時か。
靖弘 涼子は酒はダメだと言ってた。
進治 汚ねえ。おまえ、嘘ついてたな。
靖弘 嘘ついてたのはお前の方だろ。
進治 ・ そりゃあ、確かに医者は「酒は控えるように」とは言った
靖弘 ほら。
進治 でも、医者は「映画を控えろ」とは一言も言ってない。
靖弘 普通言わないよ。
進治 だからいちいち許可取らなくても、映画撮るくらいいいだろう。
靖弘 映画撮れば治る気がするんだから。いや、これは確信に近い。
治るよ。治れば、結果オーライ。
靖弘 お前「映画出来なくなったから、自分の人生がうまく行かな
くなかった」とか思ってるのか？
進治 ・ それが原因になってるのは仕方ないことだろ。
靖弘 他の皆は映画出来なくなってもちゃんと生活してるんだ。
進治 わかってるよ。でも皆と違って今の俺には何にもないんだ。
仕事も、家庭も。
靖弘 それはお前が手放したんじゃないか。
進治 手放したんじゃないよ。 ・ ・ 離れてっちゃったっていうか。 ・ ・
靖弘 今のお前は、いろんなこと映画の所為にして、逃げてるんじ
やないのか？
進治 ・ ・ じゃあ、お前は逃げてないって言えるのか？
靖弘 俺が？
進治 お前だって映画撮りたいんだろ。
靖弘 そりゃあ、撮りたいよ。だけど
進治 仕事や家庭があるから、そう簡単にはいかない。
靖弘 そう。
進治 仕事や家庭の所為にして、逃げてるんじゃないのか？
靖弘 ・ ・ お前、それで反論してるつもり？
進治 創りたい物があるのにそうやって押さえ込んでるからお前だ

って生き生きしてないんだ。

靖弘 さつき、俺の事「家族の話してる時は生き生きしてる」って。

進治 訂正。あれは「生き生き」じゃなくって「ほのぼの」だった。

靖弘 汚ねえ。

進治 だからあの頃の俺達を取り戻そうよ。

靖弘 あれは、若いうちにかかる病気みたいなもんだ。皆それを通り過ぎて大人になって生活していくの。

進治 でも、お前はあれを今でも引きずってるんじゃないのか？

靖弘 あれって？

進治 「あさきゆめみし」

靖弘 あれは・・・

進治 俺はとりあえず治療のために映画撮れば、と思ってる。でも、お前はどうかんだ？

靖弘 ・・

進治 だろ。

靖弘 ・・確かに俺は中途半端に終わったあの撮影を引きずってるかもしれない。コンテストに出せば大賞は無理でも入選ぐらいはって思ってたし。残りのシーンの構図もカット割りも今でも頭の中に残ってる。

進治 俺と一緒にじゃないか。それがお前の夢なんだから。

靖弘 でも、今冷静に考えて、あれが完成していたとしても、入選していたとは思えないんだ。

進治 そんな事ないだろ。

靖弘 そうなんだよ。自分達の作品さ、熱があるうちは鼻屑目に見ちゃうんだ。

進治 謙遜しなくても。

靖弘 他人が退屈でも、自分の子供の映像はいくらでも見続けられる。そういうもんだろ。

進治 そこへ戻るか。でも。そう言い切れるのか？

靖弘 ・・もちろん百パーセントそうだとは言いきれない。しっかりと撮って試したわけじゃない。だから時々「もしかしたら」って思っちゃうんだな。

間。

進治 撮らないか？

靖弘 え？

進治 あの続きを撮らないか？

靖弘 お前が言うな。

進治 カメラテストでいいからさ。

靖弘 カメラテスト？

進治 一体、あの頃の俺達は何だったのか。俺達は今、何に引っかかっているのか。確認してみないか？

靖弘 カメラもないのに？

進治 あるだろ。

二人の視線は靖弘のビデオカメラに。

靖弘 ・・ちよっとだけやってみるか。あのシーンのカメラテストを。

進治 そうこなくっちゃ。じゃあ、幻のラストシーン「しのぶと滝本の別れ」をやってみるか。

靖弘 ああ。・・あ、でも「しのぶ」が

進治 「しのぶ」は・・

二人の視線がニッパ―君へ。

靖弘 セリフは俺がやる。

進治 よし、やろう。

靖弘 じゃあ、ここは「いろは坂」ということで、こっちからカメラ回すから、この向きでセッティングして。

進治 せっかくだから音楽もほしいな。

靖弘 そうだな。

靖弘は箱を並べたりしてセットを作る。

進治 張り切ってるね。

靖弘 お前はどうかんだ？

進治 ああ、忘れていたものがだんだんと目の前に出来上がっていき
くみただ。

靖弘 出来上がってるんだよ。

進治 そうだな。

靖弘 じゃあ、いくか。

進治 ああ。

靖弘 シーン64、カット1、スタート。

靖弘は音楽を流し、カメラを回す。
進治は役に入り込む。

進治 「もう、こんなところまで来たか。ここから先は俺一人で行くよ。」

靖弘 「どこへ？」

進治 「風の吹くまま、気の向くまま、あの地平線の彼方まで。」

靖弘 「私はダメなの？」

進治 「しのぶ。お前はまだ俺の事を知らない。俺は本当はこんなところにいちゃあ、いけない人間なんだ。だからこのままここで別れた方がいいんだ。これ以上お前を辛い目には合わせられない。」

靖弘 「辛くなんかないのに。」

進治 「でも、ここでお前達に会えてよかった。俺みたいな奴でも、こうして誰かの役に立てたんだからな。この思い出があれば、俺はこの先どこまでも行ける気がする。ありがとう。お前達の・・・お前の事は忘れないよ。」

靖弘 「気を付けて。」

ニッパー君と見つめ合う進治。

進治 「そんな悲しい目で俺を見るなよ。」

靖弘 「さようなら。」

進治 「さようなら。」

進治はニッパー君に背を向けて歩き出す。
それに合わせて靖弘はカメラをひいていく。
が、進治は立ち止まってしまう。

進治 だめだ。やっぱりお前とは別れられない。

靖弘 え？

ニッパー君の方へ戻ってくる進治。

進治 俺を一人にしないでくれよ。

靖弘 どうした？

進治 俺と一緒にいこう。な、奈津美。

靖弘 しのぶ、だろ。

進治 俺はダメな男だ。イライラしてお前にたくさん嫌な思いさせたくもしれない。でもな、お前の事は大事に思ってるんだ。

靖弘 ・進治。

進治 「生き生きしてない俺を好きになるな」なんて偉そうな事言っただけ。こんな俺でもお前が好きでいてくれるなら、本当はそれだけで俺は生き生き出来るはずなんだよな。そんなこともわかんないで、甘えてたよ。ごめん。こんな俺でも許してくれるか？

・・・ありがとう。

靖弘 進治。

進治 お、靖弘。

靖弘 俺の事はわかるんだな。

進治 何言ってるんだ。当たり前だろ。

靖弘 よかった。

進治 見送りに来てくれたのか。

靖弘 え？

進治 いろいろと世話になったな。

靖弘 ちよつと待てよ。どこに行く気だ？

進治 風の吹くまま、気の向くまま、あの地平線の彼方まで。

靖弘 地平線なんかここにはないんだよ。

進治 見えないのか？ あの薄オレンジ色の夕焼けに染まった地平線が。そして、そこへ消えていく俺達の姿が。

進治の指差す方を見る靖弘。

進治 あれが、俺達なんだ。

靖弘 ・進治。

進治 見えるだろ。

靖弘 ・・ああ、見えるぞ。

靖弘は再びカメラを構える。

進治 「色葉匂えど、散りぬるを、わが世誰ぞ、常ならむ。有為の奥山今日越えて、浅き夢見し、酔いもせ得ず。」どうだ？ 俺達

の姿は？

靖弘 お前達が雲のまばらな夕焼け空に溶け込んでいくぞ。

進治 しっかりカメラ回してくれよ。

靖弘 ああ、良い絵が撮れてるぞ。

ニッパ―君を抱え、遠くを見つめている進治。

カメラを回しつづける靖弘。

進治が夕日に溶け込むように見える。

— 幕 —

*犬の置物は他の置物で代用して構いません。